

林芙美子・作 鶴の笛 より抜粋

昔、ききんのつづいた年がありました。その村には鶴が大変たくさんいました。鶴たちは毎日、たべものを探して歩きましたけれど、どこにもたべものがないので、気の早い鶴はみんな旅仕度をして遠くへ飛んでゆきました。

すると、足の悪い鶴と、そのお嫁さんだけが、その村へのこるようになりました。足の悪い鶴は、みんなのいなくなったさびしい沼地のふちの葦のしげったところに立ってみんなが飛びたって行った空をみていました。

ある日、鶴のお嫁さんは水ぎわのなかを、一生懸命くちばしでたべものを探していました。小魚でも一ぴきぐらいないかしら、どじょうでもいい、もう、今朝はさすがにふらふらになつて一生懸命、あっちこっち探していました。朝陽がきらきら光って広い空に浮雲が一つ

西の方へゆるく流れてゆきます。若木の林のなかは、ところまだらに陽の光が煙っていて美しい景色でした。

すると、しばらくして、何ともいえない美しい笛の音色がきこえました。おや、何だろうと思いました。いままでおなかのすいていたお嫁さんの鶴は、ふっとおなかのくちくなるような気がして、その美しい笛の音色をきいていました。

そおつと笛の音のする方へ歩いてゆきますと、足の悪い鶴が横笛を吹いていました。

「おやおや、あなたが笛を吹いていたのですか。」

お嫁さんの鶴がたずねました。

足の悪い鶴ははずかしそうにふりかえって、

「さつきね、何かないかと思って沼のなかを探していたのさ。そしたら、カチンと固いものがくちにさわったので、あわててくわえたらこの笛だったのよ。何だろうと思ってね、いろ

んな風にくわえていたら、ふっと竹の小さい穴からきれいな音がしたのさ、もう、おなかのすいたのも忘れて、これを吹いていたのさ……。」

「まア、そうでしたの、とてもきれいな音色でびっくりしました。何だか、昔のたのしいころのことがうかんで来て、とても気持ちがよくなりましたわ。」

笛の音色があまりきれいなので、おなかのすいた二羽の鶴はいままで食べることをばかり考えて、いつもよくよしていたことが馬鹿々々しくなりました。

自分たちを置いて勝手に飛んでいってしまったたくさんの鶴たちを恨んで、ふたりは毎日ぐちばかりいつていましたけれど、笛をひろってからは、笛の音色があんまりきれいなので、二人はとぼしい食べものに満足して、お話しをすることは、たのしかったおもい出話や、遠くに行った鶴たちが幸福であればいいという話ばかりになりました。

「ねえ、わたしは、笛の音色をきいていると、こんなみじめな年ばかりじゃなく、いまに、

とても豊年のつづくいい年も来るような希望が出来て、すこしもがっかりしなくなりました。今日はすこし、ちよつと遠くまでお魚をさがして来ますから、時々、その笛を吹いて下さいね。」

お嫁さんの鶴がいました。

「ああいとも、けがをしないように行っておいで。」

お嫁さんの鶴はすぐ飛び立って行きました。

2005年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。